



筑紫女学園大学リポジト

Qiu Jin and Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 崔, 淑芬, CUI, Shufen メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/96

秋瑾と日本

崔 淑 芬

Qiu Jin and Japan

Shufen CUI

はじめに

二十世紀初頭の女子留学は、転換期の中国に新思想を伝え、女子教育の発展や、思想の解放、また、辛亥革命への関与等の面でかなり積極的な役割を果たした。

本論は、当時「実践女学校」に留学した代表的な人物、革命に命を捧げた秋瑾を取り上げる。彼女の留学生活と活動を調査するため、東京都渋谷区にある「実践女学園」の旧跡（現 実践女子学園中学校・高等学校）を訪れた。学校のキャンパスの緑が色とりどりの花を美しく引き立てていた。それを見て、日本の近代詩人である児玉花外が書いた「革命の萩の花の露—秋瑾」という次のような詩を思い出し、万感胸に迫って来た。

「一代の才媛（さいえん）、
下田歌子女史の渋谷なる実践女学校に、
悲壯譚（ひそうたん）、
支那革命の血の萩（はぎ）の花
秋瑾女史は日に、燈火（ともしび）に習学（しゅうがく）せり。
光緒（こうちょ）三十二年、
安徽（あんき）巡撫（じゅんぶ）恩銘（おんめい）が暗殺事件に
連座（れんざ）し、
獄吏（ごくり）の酷（きび）しき笞（しもと）の急霰（あられ）の下
紅唇（こうしん）吐出（はきい）でし一句もなく
『秋風秋雨愁殺人』（しゅうふうしゅううひとをしゅうさつす）と書し
莞爾（かんじ）として市に斬（き）られたり、

……

吾は哀歌（あいか）を微吟（びぎん）しつ、
渋谷を低徊（ていかい）す、
優しきコスモス咲く女の学校に
女荊軻（おんなけいか）が居た興味あるローマンス。
ああ黒髪雲（くろかみぐも）の、
顔玉（かんばせたま）の秋瑾女史、
吾魂（わがたましい）は飄々（ひょうひょう）として秋雨（あきさめ）の夜に
西湖（せいこ）の畔（ほとり）に、淋（さび）しく立てる
『鑑湖女侠（かんこじょきょう）之墓』のあたりに彷徨（さまよ）う」
と、秋瑾を「革命の萩の花の露」と譬え、「露」のように輝いて、すぐに消えてしまった彼女の短い人生を嘆き、中国の秦始皇帝時代の壮士荊軻に譬え、賛美した。

本論は、秋瑾の留日経緯、在日活動及び影響等の考察を通して、女子留学教育の実状とその影響、また、彼女達の生き方を考察すると共に、歴史的な視点から近代女子留学を再評価する根拠を明らかにするものである。

一、女子留学の経緯

中国の女子留学は、欧米留学に始まった。一八八二年の、アメリカ教会の賛助による医学を勉強するための数名の派遣からであった。これが中国における初めての女子留学である。その留学は教会女学が設置された後に始まる。「西洋女宣教師は海を渡って中国にやって来て、病院を開き、救災の活動に参加した。また、女塾を設置し、中国の幼女を集め、西洋の文化、言語を教え続けた。成績の優秀な女子を外国に連れて行って、数年間の留学をさせる。」（注1）と、『万国公報』に載っている。最も早かった女子留学生は四人、一人は浙江省寧波の金雅妹であった。彼女は一八六〇年六歳で、ある宣教師にアメリカに連れて行かれ、留学した。ニューヨーク女子医科大学を卒業、一八八八年帰国、一九〇七年、天津で医科学校を設置し、中国早期の医療人材を養成した。金雅妹の次に留学したのは福州の柯金英。彼女は一八九二年、アメリカの女子医科大学を卒業、帰国後、福州婦孺病院の経営を担当した。一八九八年、李鴻章の推薦によって、中国の女性代表として、イギリス・ロンドンの女性国際会議に出席した。これは中国の女性史において初めてのことであった。あとの二人は江西の康愛徳と湖北の石美玉であった。彼女たちもアメリカの医科大学を卒業、一八九六年に帰国、祖国の医学に貢献したのである。

ところで、中国において、最初に海外への留学を提唱したのは、中国近代早期の改良派である容闳であった。容闳（一八二八年～一九一二年）、字は達萌。号は純甫。広東省香山県南屏生まれ。清末の政治改良派。十五年にわたり西洋式教育を受け、一八五四年アメリカ・エール大学最初の中国人留学生として卒業した。帰国後、西学によって中国を新しい国たらしめ、新式武器と

教育を受けた人材によって国を強めようと主張し、海外留学を提唱した。彼はそれを実現する事が中国近代化に寄与する重要な一環であると見ていた。

当時の官費留学生は、ほとんどがアメリカ、フランス、ドイツなどの国に派遣され、その習得科目は語学あるいは軍備、製造、車両機械等の操作に限られていた。一八七二年、清政府は軍事、航海、造船などの人材養成のため、百三十名の十二～十五歳の少年をアメリカに留学させた。一八八一年彼らを帰国させたが、その時、大学を卒業した者は二名しかいなかった。これが欧米留学の始めである。

一八七五年、清政府はフランス、ドイツ、イギリスなどへ研修生を派遣しており、工業と軍事人材を育成するため採鉱、航海の知識を学ばせた。以上はいずれにしても清政府の「強兵」の方針に基づいた、男子のみの留学派遣であった。

一八九四年～一八九五年の日清戦争に敗れた中国では、国力が足りないとの見解に立つ学術振興や他国留学を一層際立たせた。一九〇七年、江蘇省は十名の優れた者を選抜し、アメリカに留学させたが、そのうち三名が女性である。ここで注目すべき点は、公費留学生であったことで、これは中国史上初めてのことであった。政府による女性留学派遣の嚆矢である。

一方、二十世紀初頭頃から、日本への留学熱が沸き起こった。

一九〇五年に、一千三百年にわたって続いてきた「登龍門」、いわゆる出世するための試験である科挙制度が廃止されたこともあるが、中国国内における近代的な学校の成立が大きく立ち遅れたという状況もあった。また、日清戦争の敗北によって、中国政府は、日本が明治維新後、教育を通じて西洋学を採り入れて人材を養成し、民智を啓蒙して、強国となったことを重視し、清朝の封建体制を維持しつつ、日本と同じように教育を通じて人材を養成しようと企図した。日本を通して西洋をまなぼうという気運が高まったのである。張之洞が代表した、「中国の学問を体となし、西洋を用となす」という「中体西用」論の主張、そのほかにも留日は距離的にも近く、文字と風俗習慣が似ているなどの利点もあった。張之洞は『勸学篇』『遊学第二』で次のように述べている。「遊学の国に至っては、西洋は東洋に如かず。一つ、旅費が節約でき、多くの派遣ができる。一つ、中国から距離が近く視察しやすい。一つ、東文は中文に近く、通曉しやすい。一つ、西書は甚だ繁雑で、西学の必ずしも必需でないものは東人がほとんどすでに削除し、適宜改訂している。中日の人情風俗は近しく、学びやすい。半分の力で倍の成果を得ることができ、これに越したことはない」。つまり、中国より三十年も早く近代化に踏み出した日本は、中国に近い旅費が安く済むこと、日本語は漢字が多く勉強しやすいことが挙げられよう。特に日本には、西洋文化の主たるエッセンスが移入されており、同じ「儒学圏」にある日本的な西洋文化は中国人にとって理解しやすいこともあった。

それ以後、日本に留学する者が絶えず、年々増加し、中国国内では日本への留学熱が沸き起こった。

中国が、日本に初めて留学生十三名を派遣したのは光緒（こうちょ）二十二年（一八九六年）のことであった。上記のようにこの段階では、未だ女性は含まれていなかった。

光緒二十八年（一九〇二年）、京師大学堂の総教習である呉汝綸が日本の教育視察をした時、前山陽高等女学校校長の望月與三郎は、女子教育の重要性について次のように語った。「…国家百年の大計は女子教育にある……」。また、実践女学校の校長であった下田歌子も「私は七～八年前から、貴国の女子がわが国に遊学し、文明を求めたいと願っていることを知っている。しかし貴国の人々は、私の勧めにもかかわらず私の言うことを信じない。とりあえず、一～二名を遊学させ、効果があるかどうかを先ず試してみてもどうか」（注2）。

一方、日本政府は、「馬関条約」の利益保護と、在華勢力の拡張のため、「清国保全論」という政策のもとで、中国人留学生を大量に受け入れた。当時の日本では、専ら中国の留学生を受け入れる学校が相次いで現れた。最初の学校は一八九六年、嘉納治五郎が東京神田に創設したもので、十三名の中国留学生を入学させ、三年後、七名の留学生が卒業した。一八九九年十月に「亦楽書院」と更名した。

一八九八年、日本陸軍士官学校の予備校とされる成城学校は「清国留学生部」を設置し、一九三七年の盧溝橋事件の発生まで開校していた。中国留学生を受け入れた学校の中では、一番長かったと言える。そこでの勉強科目は、日本語と軍事基礎知識で、成績優秀な学生が日本陸軍士官学校に入る。また同年、高楠順次郎が東京本郷で日華学堂を設け、主に日本語と教養基礎知識を教えた。

一九〇一年から一九〇六年までが「留学熱」の最盛期であった。その時期に中国留学生を受け入れる学校、あるいは部署が数多く出てきた。主なものを挙げると、一九〇一年の東亜商業学校、一九〇二年の東京同文書院、宏文学院である。宏文学院も嘉納治五郎が設立した学校で、魯迅、黄興、陳独秀らが学んだ。次は一九〇三年に寺尾亨が創立した東文武学堂、同年の振武学校。一九〇四年の法政大学速成科と普通科、吉田義静の経緯学校（明治大学に所属）、一九〇五年九月の早稲田大学清国留学生部などがある。また路砒学校、警監学校、志成学校および警官速成科などがあった（注3）。

以上の学校は日本留学の風潮の中で創設された学校であるが、実際、師範学校には留学生が最も多かった。それは、清政府の学校教員不足という問題を解決するための教員養成が、日本の思惑と合致したのである（注4）。当時、東京高等師範学校、宏文学院の速成師範科などが最も有名であった。しかし、これらは男子生だけを受け入れた学校である。

本時期の留学教育は近代教育発展の中で、最も重要な一時期となっている。留学はやはり、日本が最も多かった。「学部の光緒三十二年における統計によれば、日本留学生は計一万二千三百名となる。しかし同年の各校の統計によれば約六千名余であり、また、七千名を超えている説もある」（注5）との一説がある。汪向荣の『日本教習』によれば、一九〇六年、留学生の総人数は七千二百八十五人（注6）に達した。ほかに、一九〇一年は二百八十名、一九〇二年約五百名、一九〇四年約二千四百六名という。実藤恵秀『中国人留学日本史』によると、一九〇五年の留学人数は八千名、一九〇六年も八千名になっている（注7）。

当時、実践女学校は中国の女子留学生の受け入れで最も有名であった。

二、実践女学校と秋瑾の留学

「実践女学校」は一八九九年（明治三十二年）、女子教育の先駆者である下田歌子が女性の社会的自立を目標として、豊かな教養を身に付け、女性に備わる徳性を涵養し、学問的啓発を促すために創設したものである。

下田歌子は、安政元（一八五四）年八月九日、現在の岐阜県恵那市岩村町に長女として生まれ、銚（せき）と命名された。祖父東条琴台は著名な漢学者であったが故に、親から厳しい教育を受けた。それに応えて銚は、幼いときから和歌や俳句、漢詩、日本画に優れた。江戸は明治と変わり、祖父と父は政府の招聘を受けて東京に出るが、十七歳になった銚もそのあとを追って上京した。明治五年、彼女は、宮中に出仕し、皇后（のちの昭憲皇太后）に仕えた。宮中で才女の誉れ高かった歌子には教育者としての期待がかかった。明治十八年には当時新設された華族女学校の教授に迎えられ、翌年には学監に就任した。そしてその傍ら、二人の内親王の教育係の命を受け、そのために先進諸国の女子教育の状況を視察するため、欧州留学を命じられた。二年間にわたって、イギリスを中心に、欧州諸国とアメリカを巡った下田歌子は、各階級の学校教育、家庭教育及び私学をつぶさに見学した。その中で最も大きな感銘を受けたのは、国力の基は一般子女の教育にかかっているということであった。そして、帰国した歌子は華族女学校を組織替えした学習院女子部の教授に就任し、明治三十一年、帝国婦人協会を組織し、会長に就任した。その帝国婦人協会の方針は、「新時代に生きる女性の教養とそれに裏付けられた実践力を身につけ、生活と社会の改善をはかる」というものであった。そしてその一環として、明治三十二（一八九九）年に実践女学校と女子工芸学校が創設され、現在の実践女子学園の直接のルーツはここにある（注8）。上述したように、深い日本的教養と欧州留学で培った思想を併せ持った下田歌子は、自らの教育にかける信念を、「実践」という理念を校名に冠することによって表明したのである。女性の自立とともに、アジアの連帯と国家の礎としての女子教育の必要性を訴えた。校名の「実践」は、学問を実際に役立て実行するということで、実践的能力の開発にも意を注いだ（注9）。

当時、中国女子留学生のほとんどは速成師範教育を学ぶ目的であったため、彼女は文部省に上申して「清国留学生教科規定」の認可を得て、東京の赤坂にあった西洋館を借りて、中国女子留学生速成師範科を設け、本格的に中国女子留学生の教育を始めた。

一九〇五年（明治三十八年）、実践女学校の「清国女子速成科規定」が正式に定められた。その主な内容を挙げてみる。

本校（実践女学校）ハ分教場及ビ教員ヲ繰合出来得ル限りニ於テ清国女生ノ為メノ速成科ヲ置テ別ニ教場ヲ設クル事アルベシ。

本則ノ修行年限ハ二カ年トシ特別科ハ一カ年トス。

清国女生ノ月謝ハ毎月三円トシ入学金ハ二円トス。

「清国女生ニ授クル学科」は、二カ年程度が十二教科で、修身・読書・会話・作文（邦語）・

作文（邦語綴）・算術・地理（外国地理）・歴史（外国史）・理科（動植物）・図画・唱歌・体操・手芸など、週三十六時間から成っている。

一ヵ年の速成科の科目は、修身・教育（教育理論・管理法）・心理・理科・歴史・地理・算術・図画・体操・唱歌・日本語・漢文など十二教科週二十八時間である。

所謂、清国女子速成科規定では、二ヵ年課程は、修身、会話、作文（ともに日本語）、算術、図画、唱歌、体操など十二教科週三十六時間。一ヵ年課程の速成科では、修身、教育、心理、歴史、地理、理科、日語（会話）、漢文（漢文誦読）など九科目週二十八時間。工芸速成科は、心理、歴史、地理の替りに、術科（編物・造花・図画・刺繍）が入って九科目週二十八時間となっている。清国留学教育の特徴について実藤恵秀は、その教授内容が、専門の学ではなく、上記科目のような普通学（中学程度）であり、正式な教育ではなく、速成教育であったと指摘している。速成教育には、早く西洋に追いつこうとする清国の立場が反映されている。

このことについて氏は、明治三十七年七月の中国留学生第一回卒業式のなかで、日本が千余年も昔から思想学術文化の各方面で、中国から「大いに啓発された事に対する御恩報じの一端」であると述べ、「貴国の家庭及び社会進歩のために、その貴き原動力とならん事を希望」と、告辞を結んでいる。また「修身講話」のなかでも、両国共通の道德理念を基本に、学問の男女平等と、優勝劣敗の世界情勢を論じ、纏足の弊を諷し、知徳体の三育一体論を展開している（注10）。

最初に女子留学生が入ってきたのは一九〇一年（明治三十四年）であった。彼女たちのほとんどは、父親や兄弟、あるいは夫同行で、しかも私費留学であった。中国の女子留学生について『下田歌子先生伝』の中に次のように記載されている。「明治三十四年、辛丑の歳、一人の清国女性が、ゆくりなく廻りの校舎に入学した。彼女は最初、その父兄に伴われて日本にやってくる、特に校長下田歌子先生の名を慕い、日本での完全な女子教育を受けたいために、意を決して身を実践女学校に寄せたのであったが、すでに日本語も相当話せるし、技芸の教授を受ける点に於いては格別日本人の他の生徒と変わるところがなかった」（注11）。また、中国の女性に対しては、下田歌子は「中国の女性には三つの長所があげられる。一つ、聡明で、学習がよくできる。一つ、交際が上手で対応も宜しい。一つ、性格が明るく、アメリカの女性によく似ている」（注12）。初期の中国人女子留学生は、一九〇三年には十人余りであった。これらの女子留学生の年齢はまちまちで十代の少女から五十代の女性までいた。学力の差もあった（注13）。

一九〇九年、留学生は五十五名、寄宿者は三十名であった。専科は普通科、速成師範科と速成師範工芸科であった。

当時、奉天農工商務局総弁の熊希齡が日本の工業教育制度を視察するために訪日、実践女学校をも訪問した。そこで、校長である下田歌子と、師範教育の勉強のため、毎年奉天から女子十五名ずつを同校に派遣することを契約した（注14）。

また、湖南省より、二十名の女子師範生の入学希望があり、翌年七月に、赤坂区檜町に洋館を借りて、新たな留学生部分教場を設置することになる。下田校長の「修身講話」などは、留学生

監督役の范源廉がテキストなしで通訳をしたという。范源廉は、辛亥革命後、袁世凱のもと、教育総長を勤めている。

そのため、中国からの官費女子留学生は、ほとんど実践女学校で勉強したのである（注15）。一時期、中国でも下田歌子は広く知られ、孫文も下田歌子に対し、留学生教育を依頼する手紙を送っている。また、彼の姪である伝文郁も日本に留学させている。このように多くの中国女子留学生が、実践女学校で学んだ。「女英雄」と呼ばれている秋瑾もそのひとりである。

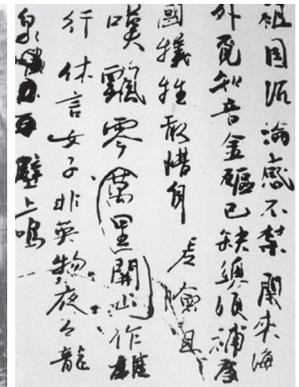
秋瑾（一八七五年十一月十五日～一九〇七年七月十五日）は清末の民族主義者であり、近代女性運動の先駆者、革命家でもある。彼女は、憂国の志強く、北京大学堂教授服部宇之吉夫人繁子の勧めにより単身日本に留学。日本政府の「清国留学生取締規則」に反発し、帰国。辛亥革命直前、徐錫麟事件に連座し、光緒三十三年（明治四十年）紹興で刑死。巾幗（きんかく。婦人のこと）の英雄・鑑湖女侠、女烈士として中国革命にその名をとどめる。



現実践女子学園中学校・高等学校
(東京渋谷区)



留学中の秋瑾



秋瑾の詩



秋瑾の墓（杭州）



秋瑾記念碑（浙江紹興）

秋瑾、本来の名は閩瑾（けいきん）。「閩」は女の子という意味で、日本留学時代に閩の字を取って秋瑾とした。小字は玉姑、字は璿卿（せんきょう）。自ら競雄（きょうゆう）・鑑湖女俠（かんこじょきょう）・漢俠女児・秋千（しゅうせん）などの字号を称した。

福建省閩侯（びんこう）県の官吏の家に生まれた。原籍は浙江省山陰県、現在の紹興である。四人兄妹の二番目で、父は家庭教師を雇って子供達に教えた。秋瑾は兄妹の中でもよく努力し聡明でもあり、成績はいつも良かったために、父は唐詩・宋詩などを特別に教え、彼女は十一歳から詩をつくることができた。

もともと秋家の家族は「書香門弟」であった。祖父の秋嘉禾（かか）は挙人であり、福建省南部諸県の県知事、廈門（アモイ）海防庁同知などを歴任した。秋瑾は少女時代を殆んど福建で過ごした。彼女の父の秋寿南も挙人であり、祖父と同じく福建省および台湾などの知事を務めた。母の単氏は名門家庭の出身であるが、伝統的な「女性は才のないのが徳である」という考え方や、男尊女卑の封建宗法思想と倫理道徳観念に反対し、女性も知識を得るべきだと主張した。この母は読書が好きで、特に漢詩の教養が高く、「才女」と呼ばれていたが、十九世紀末頃においてこのような女性は実に珍しく、遠見卓識な母親であった。秋瑾の頑強不屈、男性に負けない賢く勇ましい志を育んだのは、母親の影響や家庭教育と密接な関係がある。母親の教育により、秋瑾は杜甫・辛棄疾（しんきしつ）・李清照（りせいしょう）などの詩詞を暗誦し、時には自ら短詩を書き父に見せた。秋寿南は娘の詩を見て、「阿瑾（秋瑾に対する愛称）がもし男の子だったら必ず科挙に合格する」と呟いたという（注16）。

しかし古来の中国の女性は封建社会の下で、文化教育を受ける権利を奪われ、持てる才能を発揮することができず、また身体も損なわれた。その代表的なものが纏足である。纏足は女の子に対して、四、五歳の骨がまだ柔らかい足の指にマッサージをし、撓ませた上で一メートル以上、幅五、六センチの木棉あるいは絹の布でそのままの状態に固定させる。毎日布を巻き直し、さらにきつくして二～三年続け、十七センチぐらいの変形した足ができあがるまで持続させるものである。この苦痛を伴う残酷な纏足は、幼女の血と涙、あるいは命をかけたものであった。足が小さければ小さいほど美しいと見られ、良い縁組をすることができた。この、昔から長く続いた纏足は、女性にとって「枷」、「鎖」のようなものであった。秋瑾もまた、この悪習を免れることはできなかった。幼い秋瑾は、痛さのあまり「どうしてお兄さんはしないの？」と泣き叫んだという。

纏足された秋瑾は、女性の「運命」に屈服しなかった。彼女は兄達と同じ教育を受け、武術・棒術・拳闘・剣舞・乗馬を学んだ。武術を鍛錬した時、足が血だらけになっても止めることなく続けたのである。ある日馬から落ち、足の痛みで全身から汗が流れ落ち、祖父が心配で近寄って来そうになった。秋瑾は自分が乗馬を禁止されることを恐れ、痛みをこらえて「大丈夫です。少しも痛くありません」と大きな声で祖父に言ったという。また毎朝、近くの山に登り山頂で剣術の練習にも励んだ。

一八九一年、十七歳の秋瑾は『水仙花』・『春寒』・『梅』等二十篇余りの詩を書いた。秋

瑾を教え支えたのは母親であった。知識を教えるだけでなく、人間としての生き方と粘り強く生きることの重要性も教え込んだのである。秋瑾にとって母親の存在は、自分の将来の手本であった。一九〇六年、その母親が病死した。上海で『中国女報』を創刊していた秋瑾は、急を聞いて急いで紹興に戻ったが、すでに母は息絶えていた。悲嘆に沈んだ秋瑾は哀悼の挽歌を書いている。

「哀しい哉、病臥していた母はなぜ私をひとり残して、他界に行ってしまったのか？ 僅か六十二歳の春秋だった。国を愛し、志半ばなのに、私を育ててくれたその恩に報いてもいないのに……」と、母親への深い愛情と心の痛みを詠んだ。

日清戦争後、清朝政府は義和団事件により列強への宣戦を布告したが、それに伴い八ヶ国連合軍は北京に侵入した。秋瑾は自分の祖国へも目を向けることとなり、『鷓鴣天』（しゃこてん）（詞牌の一）という詞を以て留学の目的と自分の志を述べた（注17）。

祖国沈淪感不禁
閑来海外覓知音
金甌已缺總須補
為国犠牲敢惜身

祖国沈淪して忍びがたく
閑来海外に知己をさがしもとむ
金甌（きんおう・中国のこと）已に缺け 総て須く補すべき
国のために犠牲となるとも敢て身を惜まんや

一八九六年、二十二歳の秋瑾は、親の決めた湘郷（しょうきょう）の富商・王系の三男、王廷鈞と結婚し、二人の子供を生んだ。この頃、清朝の光緒帝は新政の「戊戌変法」を行い、一方、孫文を始めとする革命派は清朝を打倒し民国を創立しようという主張を明確にしていた。この時代の変動の中で秋瑾は、先ず改革の第一歩として、女性を「三寸金蓮」の纏足から開放することを主張した。彼女は自分だけではなく、反纏足の「天足会」を通して女性にも呼びかけるとともに、背広・洋靴・帽子という姿の男装をした。また、自ら「競雄（きょうゆう）」という号をつけ、男と雄を競おうとしている。友人呉芝瑛（ごしえい）の紹介で、京師大学堂の日本人教師である服部宇之吉の妻の繁子と知り合い、日本に留学をしようと決めた。夫の王廷鈞に強く反対され、夫は二人の子供もあるので引き留めようとしたが、「子供を連れて留学する」と言った。王廷鈞は仕方なくそれを認め、息子を自分が引き取り娘を秋瑾に押し付けた。

秋瑾が実践女学校に入学したのは、服部繁子が実践女学校の校長である下田歌子に秋瑾を推薦、入学させたのである。

一九〇四年六月二十八日、秋瑾はまだ三歳になっていない娘を抱いて、服部夫人と一緒に塘沽から日本の「独立号」客船に乗り、神戸を経由し七月二十四日に汽車で東京に着いた。日本語の

勉強のため、先ず駿河台にある「中国留学生会館」が開設した「日本語講座」に入り、翌年実践女学校の分教場で二ヵ年間、特別科に入学した（注18）。

筆者は秋瑾の留生活と活動を調査するため、東京都渋谷区にある「実践女学園」の旧跡（現実践女子学園中学校・高等学校）を訪れた。三人の職員の方は熱心に当時の書類を探してくださり、そこで貴重な「證書臺帳」や卒業生の名簿などを見せてもらった。秋瑾は一九〇五年八月に実践女学校に入学したことが記録に残っている。

『清国留学生部・分教場日誌』（原本：明治三十八年七月十七日～十一月七日 1綴10枚）の中に、「明治三十八年八月五日、本日学生秋瑾入校ス」と記載してある（注19）。

その間、下田歌子の男女の学問の平等と優勝劣敗の世界情勢という主張は、秋瑾が最も大きな感銘を受けたものである。「大凡一国ノ女学優レタル者ハ其ノ男学必ズ優ル。何ゾヤ。母教ノ斯ク然ラシムルナリ。一国ノ女体強キ者ハ、其ノ男体必ズ強シ。何ゾヤ。母種ノ然ラシムルナリ」として、纏足の弊を諷刺し、知徳体の「三育一体」論を主張、また「女子モ亦国民ノ中ニ在リ」と、愛国の精神を強調していた。二十世紀を目前にして、新しい世紀に相応しい女子教育に情熱を傾け実践してきた下田歌子の精神は、秋瑾の胸に深く感銘を与えたのであろう。

入学後の秋瑾は、教場でも休み時間中に詩を吟ずるなど、独特の雰囲気を持っていたという。中退する時、愛誦していた自筆の詩集『白香詩譜』一冊を坂寄舎監の手元に残して去った。この個性的な女性の存在について、あるとき坂寄舎監が報告したところ、下田歌子は「よく見抜いて大きく扱え」と答えたという。

この頃清政府は、男子留学生が日本の陸軍士官学校の予備校である成城学校などを通じて、軍事の演習を希望する傾向があるのを禁止しており、留学生の急速な反封建意識の目覚めに対して警戒を強めていた。一九〇五年十一月二十六日、文部省が「清国留学生取締規則」を公布したのも、清政府の意を受けたため、このときに留学生の「校外の取締」や監督を強化し、「性行不良」清国人の入学を禁じている。この対応に秋瑾は反発、十二月五日富士見樓の会合に出席して過激な発言を行っている（注20）。

秋瑾は留学生の反対集会に参加するため、十七人の女子留学生と共に退学を覚悟で一時校内を去ったのであった。『下田伝』第十一章の中に、「留学生の身に何かと事故が多く、この一ヵ年にも、或いは良人が帰国したり、水の違ひということで、自分が病気をしたりして、だんだんと帰国するものが現れ、明治三十九年の七月、晴れて卒業した者は二十人のうち十二名に減っていた」と述べられている。このような風潮の中で秋瑾は、一九〇五年十二月、退学して帰国した。日本には僅か二年しか滞在しなかったが、彼女の人生においては、成熟した女性革命者となったという意味において大きな転換点であった。

その時、「私は帰国後、革命に尽力し、皆様と中原で会うことを臨んでいる。」（注21）と同胞に語っている。

秋瑾は紹興に戻り『中国時報』を発刊、女権、女子革命を主張し、「光復軍」、「敢死隊」を組織した。また、紹興の明道女学校、浙江省の潯溪女学校の教員を歴任、一九〇六年の夏、上海

へ出て革命運動の中で活躍、『中国女報』を創刊した。『中国女報』の中で、「本報の発刊の目的は、女学を振興し、女性を解放するためであり、団体化するためである。将来は中国の婦人協会もつくろう」（注22）と主張しており、また、男尊女卑を批判し、男女平等を提唱した。彼女は「警告妹妹們」の文章の中で次のように述べている。「……二万々の女同胞、まだ真つ暗地獄にいるようだ。一人の人間として志を持たなければならない。志を持っているなら、自立することができる。今、女学生も多くあり、工芸業も盛んになった。一つの工芸技術を学び、教習になったり、工場を開いたり、どうして自我自立ができないのだろうか……女子は教育を受けるべきだ。そうすれば家業が興隆、男子に敬重される。……女性は息子を産んだら必ず学堂に入れる。娘なら、やはり同じように教育させ、纏足は絶対にしてはいけない」（注23）。また彼女は、「日本の女学が振興し、皆一つの技能を持って生活し、父母を養い、家庭においても夫を助け、子には教育をさせる。こんな国は強くなるはずだ」（注24）と、女子教育の発展と国家の発展との関係は切っても切れない関係にあり、その重要性を認識しなければいけないことを説いた。

同年の冬、再び故郷の紹興に戻り大通学堂で教えながら、安徽省の革命党員である徐錫麟と連合して武装蜂起の計画を立てた。一九〇七年五月、徐錫麟の蜂起失敗と共に、秋瑾も逮捕された。「秋風秋雨人を愁殺す」の一句を書き残したが、自分の名前である「秋」を取って、二字の「秋」と「風雨」に合わせ、武装蜂起の失敗、そして祖国の運命への憂いと自分の沈痛な心境を表したのである。七月十五日、秋瑾は白い服を着て足枷をされ、両手を背中に縛り上げられて清兵に連行され、刑場になっている紹興古軒亭口で斬刑された。享年三十二。

秋瑾の死に紹興の人々は憤激し、「秋瑾は何も供述しなかったのになぜ殺されたのか？ 古軒亭口は強盗の処刑場だ。秋瑾は強盗ではないのに、どうしてそこで処刑したのか？」と不満を言い合ったという。

秋瑾を記念するため孫文は、「巾幗英雄」と高く評価した。

おわりに

秋瑾の遺骸は九回転々とした。一九一一年の辛亥革命後、杭州西湖西冷橋畔に移されて墓ができた。「秋瑾烈士記念碑」は一九三三年十一月に、秋瑾の故郷浙江紹興古軒亭口に建てられたが、これは蔡元培が碑文を揮毫したものである。記念碑は高さ一、四五メートル、幅一、二〇メートル。中国女性の解放を唱えた彼女の生涯は波瀾万丈、まさに、秋瑾が『鷓鴣天』という詞の中で詠じたとおり、悲願の人生であった。

嗟險阻	陰阻なるをなげき
嘆飄零	飄零を嘆じ
関山萬里作雄行	関山（故郷のこと）を遠く離れ雄行をつくす
休言女子非英物	女子は英雄に非ずと言うなかれ

日本には秋瑾の記念碑はないが、彼女が留学した場所、実践女学園には秋瑾の足跡が残っている。筆者は実践女学園で調査を終えた後、学園キャンパスを見回りながら、秋瑾が和服に日本の短刀を持っている姿を写真で見、また彼女の人生を思い、感慨が殊に深かった。

数千年にわたった儒教の「男尊女卑」という思想、何千年も続いた女性に対しての「三綱五常」と「三従四徳」という教育に基づいて、中国では完全に男尊女卑の社会が形成された。中国の社会では女性を男性に依存させ、完全に女性を従属的な地位に追いやった。清末に於ける女子の留学は、画期的なこととは言える。彼女達の運動は女性を伝統的な理論と封建的な家庭制度から解放するだけでなく、中華民族全体の解放も求め、植民地主義による支配を打ち破り、民族を救い、独立した国家建設と連動していた。これら女性自身の意識変革のための行動は、今日の中国女性の解放に最も重要な影響を与えたのである。

注

- 1、『万国公報』光緒25年6月 台北華文影印本第30冊 1969年出版
- 2.「吳汝綸と『東遊叢録』 -ある「洋務派」の教育改革案-」
- 3、実藤恵秀『中国留学生史談』P.193～200 第一書房 1980年
- 4、李記喜『近代中国的留学生』P.135 人民出版社 1987年
- 5、陳青之『近代教育史』上 P.135 中華書局
- 6、汪向荣『日本教習』P.117 三聯書店 1988年
- 7、実藤恵秀『中国留学生史談』P.451 第一書房 1980年
- 8、大関啓子「まよひなき道—下田歌子 英国女子教育視察の軌跡—」
『実践女子大学文学部紀要』第36号 実践女子大学 1994年3月
- 9、実践女学校『下田歌子先生伝』1943 山崎朋子『アジア女性交流史』 P.97 筑摩書房
- 10、下田歌子「教育中国婦女の事」『順天時報』1907年
- 11、実藤恵秀『中国人日本留学史』P.76 三聯書店 1983年版
- 12、下田歌子「教育中国婦女の事」『順天時報』1907年1月12日
- 13 実藤恵秀『中国人日本留学史』P.76 三聯書店 1983年版
- 14、「各省遊学叢誌—奉天」『東方雜誌』第四年第三期・教育 P.63
- 15、実践女学校『下田歌子先生伝』1943年
山崎朋子『アジア女性交流史』 P.97 筑摩書房
- 16、王成聖『鑑湖女俠秋瑾』P.66 台湾中外圖書出版社 1980年
- 17、梁占梅『中国婦女奮闘史』P.63 建中出版社 1942年
- 18、『秋瑾集』P.13～14 上海古籍出版社 1979年
- 19、秋瑾『致湖南第一女子学堂書』『女子世界』第二年第一期 1905年6月

- 20、郭延礼『秋瑾研究資料』 P.61～68 山東教育出版社 1987年
- 21、周帶棠等『秋瑾資料』 P.23～26 湖南人民出版社 1981年
- 22、「創辦中国女学报之草章及び意旨広告」『秋瑾集』 P.10 上海古籍出版社 1979年
- 23、梁占梅『中国婦女奮闘史』 P.38 建中出版社 1942年
- 24、『秋瑾集』 P.13～14 上海古籍出版社 1979年

(さい しゅくふん：アジア文化学科 教授)